

清末小説から 116

2015.1.1

- いくたびかの阿英目録 8 樽本照雄 1
早期漢訳ドーテ「最後の授業」 5 黄静英訳「最後之授課」のばあい..... 神田一三 6
清末民初俄国小説译介路径综考(下)..... 付 建舟 16
商務版「説部叢書」研究の昔と今 3(下) 改組の時期..... 樽本照雄 20
清末小説から 15、19、27

本年もよろしくおねがいいたします。『清末小説から』は、1、4、7、10月に本研究会ウェブサイトで公開しています。既刊号の一部を見ることができるでしょう。次号をおたのし

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録 8

樽本照雄

明治42年は1908年か

顔廷亮『黄世仲革命生涯和小説生涯考論』上下(北京・人民出版社2012.4)を入手する。参照して樽目録に作品情報を追記した。

目録の編集をしていると専門書は特に有用だと感じる。未見作品の刊行情況について知りたい。既見作品ならば、正確に記述しているかどうかを点検する。利用できる文献は、樽目録に

追加記入するのが編集方針だ。それが私自身の勉強にもなる。

黄世仲『大馬扁』の刊年が問題にされている。今まで1908年発行だと思われていた。ところが1909年であるらしい。そういう顔廷亮の指摘だ。日本の年号が関係しているから興味がわく。顔廷亮の説明をざっと紹介しよう(614-615頁)。

楊世驥が『文苑談往』(1945. 73頁)のなかで『大馬扁』単行本は「明治四十二年九月出版」であるという。それは光緒戊申(1908)だとも説明している(1908は顔廷亮による注釈)。ところが阿英目録68頁は「宣統元年(1909)刊」とする。該作品が阿英編『晚清文学叢書・小説三巻』(北京・中華書局1960.8 / 1982.9)に収録されてその説明が1908年刊行となっている。どういふわけか、明治42年が戊申1908年と結びついてしまった。顔廷亮を含んで研究者たちは、楊世驥と阿英説にもとづいて長期

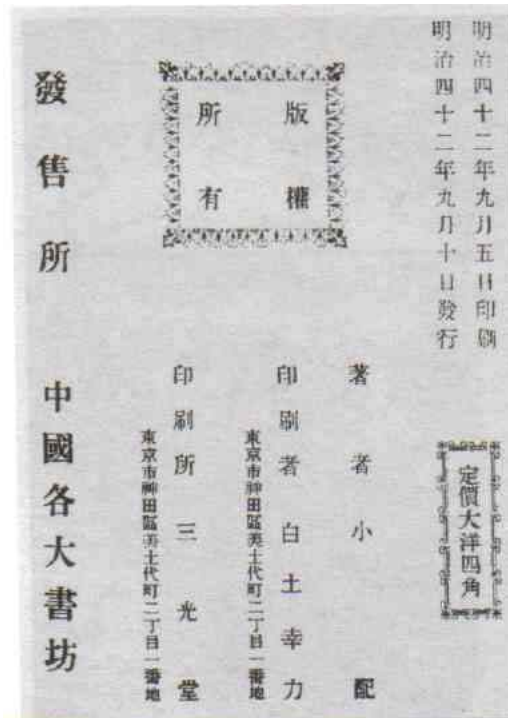
間にわたってそう把握してきたのだ。

明治42年9月は正しいが、その西暦は1908年ではない。1909年だと指摘したのは日本の学者樽本照雄だ。1988年3月発行の『清末民初小説目録』において明治42年は1909年だと明記している。また『新編清末民初小説目録』(1997.10)、『清末民初小説年表』(1999.10)でも同様だ。残念なことに、顔廷亮を含んだ研究者たちは誰もこのことに注意せず、西暦の1908年だと言ってきた。

以上、要約をおわる。

顔廷亮が自分を含めて、間違いだったと反省している文章だ。自分を含めてそのように書く中国人研究者は、珍しい。自分だけは間違わない、と知らん顔をするのが普通だからだ。

楊世驥が説明した「明治四十二年九月出版」部分は正確である。証拠として最近の書物写真から引用する。



付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』2013.1より

確認しておこう。奥付写真はつぎのようにある。「明治四十二年九月十日発行 / 著者小配 / 印刷者白土幸力(東京市神田区美土代町二丁目一番地) / 印刷所三光堂(住所同左)」

顔廷亮の文章に見えるとおりだ。楊世驥は、明治42年について戊申1908年と注釈して誤った。阿英も1908年といている。だが、もうひとつの阿英目録に見える1909年は、無視した。

顔廷亮は、蘭州市にある甘肅社会科学院文学研究所に勤務している人だ。なぜ、樽目録初版、第2版、および『清末民初小説年表』を手元において見ているのか。日本で出版された書物だ。顔廷亮は、実物を所有しているのか。不思議に思う読者もいるだろう。それらは私が贈呈したものにほかならない(第3版、第4版CD-ROMも送ったが言及がない。理由は不明)。

私は、顔廷亮に会ったことがある。最初は、1987年11月のことだった。

当時、南京の江蘇省社会科学院にいた張純から連絡があった。劉鶚(劉鉄雲)誕辰一百三十周年紀念學術討論會を淮安で開催するという。誘われたので参加することにした。直前に何があったのか知らない。張純によると、彼は上級によって討論會担当からはずされた。劉徳隆に連絡するようにと知らせてくる。上海から列車で淮安に行くつもりでいた。まさか、鉄道が通じていないとは思ひもしない。かといって参加を中止する考えもなかった。劉徳隆に案内されて長距離バスの旅だ。朝の6時に出発して夕方の5時前後に到着したか。道中では、交通事故を複数目撃した。事故が発生するほど物流が動いていると感じた。私は、バスの前方に座っていた。そのバスが、停車しているトラックに追突し、フロントガラスが割れたのには肝を冷やした。なぜなら、自動車用のガラスではなく、普通の窓ガラスがはめてあったからだ。鋭利なガラスが目の前に迫ってきたのだから驚くはずだ。バスの品質どころの水準ではなかるう。それでも動くだけましか。追突の衝撃でバスのハ

ンドルがゆがんだ。回らない。感心したのは、運転手がなんとか応急修理をして動かしたものだ。よくもまあ、無事に会場に着けたものだ。会場のホテルで待たされ、大会関係者から外国人は大会に参加できない、と言われる。中国では外国人に開放しない、つまり外国人が参加できない学会があるとは知らなかった。別にアメリカ人がひとり来たが、追いついたとも聞いた。ひどいことをする。あとでわかったのは、討論会とは称しながら、その実は政治的な大会だった。劉鉄雲の名誉を回復(中国語で平反)し、今後劉鉄雲の後裔には政治的弾圧はしない、という意味を持つ。そういう制度だそうだ。現代中国では文学と政治が直結しているという生々しい現実を目の当たりにした。討論会には参加を許されなかったが、劉鉄雲の故居と墓に案内される。劉鉄雲の後裔たちは、墓参りが許可されなかったと立腹していた。おかしいことがあるものだ。故居と墓は、劉鉄雲討論会が開催される機会をとらえて新築したもの。故居には案内小冊子まで作成されている。墓は、町の中心から遠く離れた畑の真ん中に設置してあった。地方政府が力を入れたとわかる。冬のことで何もない畑のなかを、1時間以上も歩かされたのだ。別に周恩来ゆかりの故居もあったことを思い出す*25。中国人研究者が討論会を終えると、食事は同じ食堂でとる。あいさつをかわし、その中に顔廷亮がいたというわけ。その後、私の著作、目録、年表、年刊『清末小説』、季刊『清末小説から』を贈呈していた。

顔廷亮の文章は、以上のいきさつがあったことを背景にしている。

さて、樽目録では、『大馬廐』の刊年については「明治42年を「清光緒三十四年、1908」と誤る」と注記している。誤りが広まっているから注記が必要だと判断した。「誤る」とわざわざ書く理由である。

文学辞典、小説目録にはどのように説明しているのか。関係部分だけをざっと掲げよう(誤

植は正した)。

問題は、明治42年をどう書いているかだ。

「宣統元年(1909)刊」と表記しているものは、基本的にここでは除外する。ご注意いただきたい。1909年と正しく記述しているものがほかにもある、とご指摘いただくことは無用である。

1945楊世驥[談往73]

明治四十二年九月、正当光緒^{三十四}年^{九月}之時 誤りのはじまり。1909年であるのに戊申(1908)とした

1960 阿英編『晚清文学叢鈔・小説三卷』叙例は「1908」年刊行

1990張 中[提要1053]

明治42年即光緒戊申(1908)と誤る

1993執筆者不記[近代19]

1908^年出版、書前有「吾廬主人梭功氏戊申(1908)八月二十日序」

1993顔廷亮[全書47]

明治42年を「清光緒三十四年、1908」と誤る

1993晏海林[歴近435]

日明治四十二年、清光緒戊申年(1908)と誤る

1994陳鳴樹[大典160]

1908刊と誤る

1995韓希明[近大33]

明治四十二年即光緒戊申(1908)と誤る。また阿英小説目録所収爲宣統元年(1909)本とも

1998辜美高ら([新加19])

明治42年を光緒三十四年1908と誤る

1998胡從經[香港3]

光緒三十四年(1908)初版とする

1998王繼權ら[系目24]

明治四十二年即光緒三十四年戊申(1908)と誤る

1998高洪鈞[古大902]

明治四十二年即光緒戊申(1908)と誤る

1999孟新芝[通典584]

明治四十二年即光緒戊申(1908)と誤る

2001執筆者不記[学大1599]

明治四十二年(清光緒三十四年、1908)と誤る

2002郭天祥[世仲年228] 1908.9

2002陳大康[編年221]

於本月(光緒三十四年1908八月)或稍後出版

2004馮一涓[目白36]

題「戊申八月二十日吾廬主人梭功氏謹序於海外」

2005執筆者不記[古提690]

清光緒三十四年(1908)と誤る

2008劉永文[劉晚231]

日本東京三光堂, 1909年 樽目録第3版から引用するが明治42年は不記
2012顔廷亮[廷亮615]
明治四十二年は1909年 正しい
2014陳大康[編年 1842]
明治四十二年九月十日〔宣統元年七月二十六日〕
正しい

ならべていて気が滅入る。

正しいのは、顔廷亮だ。2012年にいたるまで誤りが続いている（[劉晩231]は除く）。

楊世驥の1945年以来だから、顔廷亮が気づくまで約67年という時間がかかった。なんだろうか。日本の年号明治があれば、それが西暦の何年に相当するのか普通は調べるだろう。誰も確認しなかったのだ。

それにしても、顔廷亮の説明は別の意味で興味深い。中国人研究者が小説目録、文学辞典についてどう考えているかがわかるからだ。

小説目録は見る。それは確かだ。だが、見るだけ。あるいは、参考にして写すのみ。研究者の多くは、書誌情報は先行文献を引き写すものだと考えているのではないか。そうでなければ、上のように間違いが継承されるはずがない。信用を失うはずだ。現在でも中国では再生産されている。

結局のところ、小説目録に記載された書誌は重視すべきものとは考えていない。後述するが、中国の著名研究者から、某作品の初版は見えないがそれがどうした、といわれたことがあるくらいだ。中国では、初版を見ない研究が普通なのだろうか。どうもそうらしい。基本的な部分でズレている。最近経験したのも同じようなことだ。中国の研究者から『清末小説から』に投稿があった。その人の著作は、私も注目していた。原物を写真で掲げて、とても有用だ。目録に追記したのはいうまでもない。その人の文章には、いくつかの箇所が違っている。樽目録第6版が無料利用できることを知らせたうえで著者校正に出したとき、それを注意した。だが、

ほとんど無視をするのだ。まあ、そういう判断ならば、それでもかまわない。あまりにひどい作品名の間違い部分については、私が所有する書物を複写して添付ファイルで送った。ようやく誤りを認めた。ということは、その一見資料に厳密そうな研究者は、実物を見ずに、実物を見ている私の指摘を否定したことになる。やれやれ。

無視をしてもかまわない。中国の学界では小説目録とはそれくらいの価値しかないらしい。樽目録もその系列に位置づけられているとわかる。意外には思わない。いくら正しい記述をしても中国人研究者は、気につけない。注目しない。資料のない日本で、2次資料だけを集めて目録を作成した。なにも知らない外国人が勝手なことを書いている、と考えるからだ。中国人研究者のおおかたの反応である。今まで私が経験してきたところだ。

樽目録を知っている顔廷亮は例外だろう。中国で刊行した樽目録第3版（『新編増補清末民初小説目録』）を除いては、一般にはそれ以前の樽目録についての知識を持ち合わせていない。無視するもなにも、目録の存在自体を知らなければどうしようもないではないか。

中国の学界では、研究に序列がついているらしい。中国人研究者と話してわかった。ある著名な中国人研究者の名前が偶然に出た。話しているその人は即座に、彼は研究論文を書いていない、作品集を編集してばかりいるからダメだ、と吐き捨てた。別の著名研究者からは手紙で、編集者が立論しろとうるさい、資料についての論文では研究誌に掲載してくれない、と訴えてきたことがある。両者に共通することがある。すなわち、現在中国の研究界では、作品について論じることが最優先される。書誌に関する基礎的な作業は、後まわりのようだ。『繡像小説』発行遅延説を検討するとき、その実状を見ることができ（後述）。

学界における優先順位は、私が見るところ、

以下のとおり。

上位から、著作単行本>研究論文>版本研究>作品資料集の編纂>辞典項目>年表(大事記)>作品目録編集、になるらしい。それよりも、あるいはおおざっぱに、研究者は学術論文を書くのが仕事、目録作成は図書館司書の仕事だと役割が分担されているのか。どうもそのような気がする。研究論文にしても、対象が翻訳小説だと軽く見られる傾向があることは、今はいわない。

どのみち最下位の位置づけでは、目録類の編集に学術上の評価がなされることもない。中国の研究者は、それを知っているから力が入らない。ほかの目録から引用してすませる。それが当然の行為であるとわかる。誰も信用しないはずだ。基礎を固めて、そのあとで立論にとりかかる。その考えが通用しないようなのだ。ところが、実際には、論文を書くときに世話になるのは、まっ先に作品目録であったりする。その矛盾に気づかないのか。まあ、日本でも似たようなものかもしれない。

そういえば、私が1970年代に『繡像小説』などの小説目録を複数作成発表していたころを思い出す。研究上どうしても必要だから編集し公表していた。当時、中国の清末小説雑誌を探索する研究者は、日本では存在していなかった。あくまでも1970年代の日本について説明している。便利な雑誌の影印本など影も形もないころの話だ。『繡像小説』の全冊揃いは、日本には学者のひとりだけが所蔵していた。日本の公共図書館、大学図書館ではどこも所有していなかった。知っている人は知っている。大方が興味を示さなかつただけだ。

中国の「文化大革命」の影響を十分すぎるほど受けてきた日本の学界だった。中国学界で批判が集中していた清末民初小説研究は、無視される分野であることはいまでもない。無視ならまだいい。日本学界においても誰もが批判的にとらえていた時代だった。現在から見ると想

像もつかないだろう。すると、私の先生筋から「樽本は目録しか作成しない」と伝える知人がいた。伝える知人も知人だと、あきれたものだ。つまり、誰でもできる(?)目録編集よりも、研究論文を書け、というありがたいお言葉だったわけだ。私は日本の学界常識習慣を知らない駆けだしだった。自分では研究の基礎作業として不可欠だと考えたのだ。それが、現在の樽目録編集まで役立っている。あの時、やめないでよかった。

本稿では、今後も間違いの引用実例をいくつか紹介するつもりだ。

その中では、阿英目録は特別な存在であることがわかる。いまだに清末小説目録の元祖として引用されるからである。ところが、『大馬扁』に関しては、研究者のあつかいが明らかに矛盾している。阿英目録68頁の正しい「宣統元年(1909)刊」は取り上げなかった。なぜなのか。明治42年の表記がないからか。説明してほしいものだ。 罫

【注】

25) 樽本「劉鉄雲故居訪問日記」『清末小説から』第8号1988.1.1、1-6頁。要旨：淮安に公開された劉鉄雲の故居訪問したいきさつを述べる。

樽本【国際学会未発表】「劉鉄雲和日本人」劉鶚誕辰一百三十周年記念学術討論会 淮安・楚州賓館 中国 1987.11.11。要旨：(中国語)討論会で報告するために準備した原稿。未報告としているのには事情がある。その学会は、外国人の参加することができない種類のものであった。現地に到着してからそのことを知った次第。『清末小説集稿』に収録。

樽本「劉鶚和日本人」『大阪経大論集』第181・182号1988.3.31、269-275頁。要旨：(中国語)劉鉄雲と交際があった日本人について調査した結果を述べる。中国での学会発表のために用意した原稿である。

早期漢訳ドーデ「最後の授業」5

黄静英訳「最後之授課」のばあい

神田 一三

ドーデ「最後の授業」を漢訳した早期のものは、少数だがいくつかある。ただし、(法)文学大家都徳著、匪石訳「(教育小説)最後一課」(『湖南教育雑誌』2年1期1913.1.31)は除く。胡適訳「最後一課」にもとづいて書き換えた作品だからだ*44。厳密な意味で翻訳ではない。

早期漢訳のなかのひとつが、1915年の(黄)静英女士訳「(普法戦争軼事)最後之授課」*45だ。

で翻訳してある。

順番からいえば、最初の漢訳と考えられていたのは、胡適が白話で翻訳した「最後一課」(はじめの題名は「割地」1912。のちに改題)である。「考えられていた」と書くのは、それより以前に別訳が公表されていることが判明したからだ(参照:神田「早期漢訳ドーデ「最後の授業」

最初の漢訳虞霊「戦後」のばあい)。

胡適漢訳には、削除が多い。短篇小説をさらに削除する理由がわからない。しかも、胡適が読者に向かって印象づけようとしたフランス語原文からの漢訳ではない。英語翻訳(レイノルズ英訳)が底本だ。この点について胡適は、彼が行なった林訳小説批判との関係で生涯にわたって嘘をつきとおす必要があった*46。

というわけで、全文の漢訳といえば、最初が黄静英訳「最後之授課」になる。そう郭延礼が指摘する。時間から見れば、胡適漢訳が1912年で先行する。だが、省略、削除が多いところから、「全文」すなわち全訳ならば、1915年の黄静英漢訳になるという。それが郭延礼の考えだ。はたしてそうなのか。

郭延礼論文

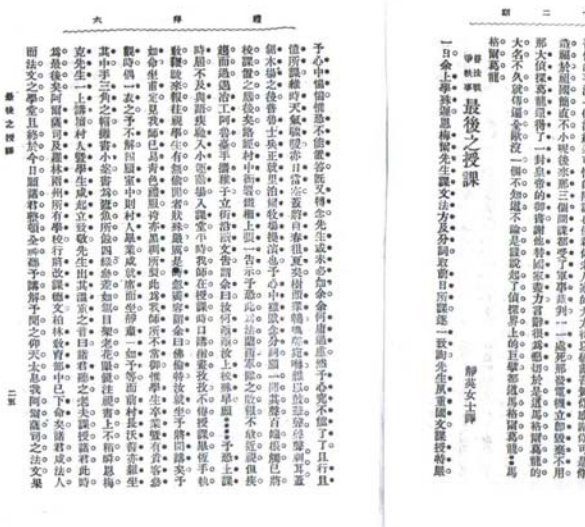
郭延礼「都徳《最後一課》的首訳、偽訳及其全訳文本」(2008)*47である。

該論文後半の黄静英部分を取りあげる。論文前半は、韓一字「陳匪石訳」《最後一課》与胡適訳《最後一課》考略」の紹介だ。本稿とは直接の関係はない。後半を要約して以下のとおり。

1 黄静英訳は、全訳である。胡適が削除した箇所は、すべて原文通りに翻訳してある。

2 人名、地名の音訳は、胡適訳よりも黄静英訳のほうが現在の訳に近い。例:アメル(胡訳は漢麦/黄訳は恩梅爾。筆者注:郭延礼は現代訳として哈梅爾を示す。これはおかしい。ハメルとなり英語読みになって原音からはずれる)、黄静英のフランス語は相当に水準が高い。

3 participe を胡適は「静動詞」と訳し、そ



『礼拝六』掲載

原作者不記だが、ドーデにまちがいない。文言

れほど正確ではない。だが、黄静英は正しく「分詞」とする(その箇所は「恩梅爾先生課文方法及分詞」)。この女性翻訳家のフランス語は、相当に高い水準に到達している。

4 黄静英訳は原著に忠実であり、基本的に逐語訳である。訳文はわかりやすい文で自然流暢だ。ただし、「誤訳」がある。先生が着ている濃緑色のフロックコート「深緑色の礼服」を「黒^{ママ}[青]色礼服(黒いフロックコート)」にした。黒い絹の小さな丸い帽子「黒網小圓帽」を「袴亦黒網(ズボンで黒い絹の)」にした、などなど。以上、要約を終わる。

郭延礼によれば、こうだ。黄静英訳には「誤訳」がある。だが、結局のところ、全訳としては黄静英漢訳が最初になる、と。郭延礼は、黄静英がもつフランス語能力の高さと、彼女がなしとげた漢訳を絶讃するのだ。

彼はその結論を導きだすために、複数の訳文を使用した。

すなわち、胡適漢訳、黄静英漢訳およびフランス語の現代漢訳を比較検討した。ただし、その現代漢訳についての説明はない。どのみち、郭延礼がフランス語原文を見たのではないことは確かだ。

黄静英が漢訳するさいに使った原文は、フランス語にちがいない。郭延礼は、そう思いこんでいる。相互にくらべ対照するには、3種類の漢訳を見るだけで充分だと考えたはずだ。ここに英訳があがっていないことに注目する。私が指摘しても、彼は理解できないのではないか。なぜ、ここに英語翻訳が必要なのか、と問うだろう。黄静英は、フランス語から直接翻訳したに決まっている。そのように反論しそうだ。本稿では、はたして郭延礼説が正しいかどうかを検討する。

胡適の漢訳「最後一課」を調べたとき、英訳が必要だった。胡適は、あたかもフランス語原文によって漢訳したように装った。本当かどうかは、実物を見なければわからない。それと同

じだ。資料に基づいて確認することがだいじだと考える。

フランス語原文からの漢訳か

黄静英は、英語とフランス語がともにできた。郭延礼は紹介してそういう。ならば、底本を特定するためには、英訳が欠かせない。当たり前ではないか。

そう考えると、郭延礼は、基本資料の操作で間違いをおかした。それに気づいていない。フランス語(の現代漢訳本)だけをあげていることからわかる。黄静英はフランス語原文にもとづいて漢訳した。その考えから郭延礼は自由になることができなかった。その結果は、無惨なものとなる。

フランス少年がアメル先生から質問されるのは、フランス語の *participe* だ。黄静英は、これを正しく「分詞」と漢訳した。このことは、この女性翻訳家のフランス語が確実に相当な水準に到達していることを証明する、と郭延礼はいう。

「分詞」については、郭延礼は前出韓一字論文を参照している。郭延礼のこの論文は、もとが韓一字論文を紹介するために書かれた。

それはおいておく。郭延礼は、フランス語しかいわない。だが、英語の *participle* について当時の英漢辞書には、「分詞、中言、両用詞」と訳語がついている。こちらかもしれないではないか。

黄静英の翻訳は、原著に忠実で基本的に逐語訳だ。これが郭延礼の下した評価である。フランス語原著と漢訳を比較対照しなければ得ることのできない結論だろう。だが、本当にそうなのか、と私は疑う。

郭延礼は、「誤訳」があるといって2カ所を取り出した。ところが、この部分こそが、底本を特定するための手がかりを提示しているのだ。それを「誤訳」だと説明するのはいかがなものか。考察不足だといわなければならない。

郭延礼が「誤訳」だとする2ヵ所をくり返す。細かい箇所だ。しかし、漢訳の底本を特定するためには、重要な意味をもっている。

ひとつは、アメル先生が着ている濃緑色のフロックコート「深緑色の礼服」を「黒[青]色礼服(黒いフロックコート)」に「誤訳」した。

黄静英の訳文は「青色礼服」だ。漢語の「青」は黒色を含んでいる。郭延礼は、そこから連想して写し誤ったのかもしれない。

もうひとつは、黒い絹の小さな丸い帽子「黒網小圓帽」を「袴亦黒網(ズボンで黒い絹)」に「誤訳」した。

フランス語原文が微妙な表現をしているばあいは、誤訳する可能性が高い。また、普通名詞にしても色彩は文化によって異なる。虹を普通に7色というが、5色とか3色に表現するところもある。あるいは、中国にはない事物は漢訳しにくい。ドーデ「最後の授業」に出てくるフロックコートを、胡適は「袍子」と漢訳した。アメル先生が中国服の長衣を着ている。適切な訳語ではない。それに対して、黄静英が漢訳して「礼服」にしたのは、よろしい。

だが、郭延礼が「誤訳」だと指摘したズボンはどうか。まさか帽子とズボンを取り違える人はいないだろう。郭延礼は、ここで気づくべきだった。黄静英は、フランス語の達人だ、と彼は讃美しているではないか。日常に使用する帽子とズボンの区別がつかない。普通に考えて、おかしいことだと感じなかったか。私は何度でもそう思う。郭延礼が「誤訳」だと決めつけたのは、軽率だった。

「最後の授業」の英訳

本稿で使用するフランス語原本は、以下のものだ。

1 Alphonse Daudet. "La dernière classe" *Contes du Lundi*. PARIS: ALPHONSE LEMERRE, ÉDITEUR, 1873. 電字版

これが、基本になる。

私が胡適漢訳の底本を特定するために参照したのは、次の英語翻訳だ。

4種類をあげたが、同文のものが実際には3種類だ。念のために4種類を示す。

英語翻訳

2 Alphonse Daudet 著、Marian McIntyre マッキンタイア英訳 "THE LAST LESSON" *Monday Tales*. BOSTON: LITTLE, BROWN, AND COMPANY, 1900. 影印本

3 Alphonse Daudet 著、Francis J. Reynolds レイノルズ英訳 "THE LAST LESSON", *INTERNATIONAL SHORT STORIES FRENCH*, 1910 (1909, The Frank A. Munsey Company)

影印本、電字版

4 George Burnham Ives アイヴス英訳 "The Last Class" *Alphonse Daudet's Short Stories*. New York and London: G. P. Putnam's Sons, 1909. 電字版*48

The Last Class

The Story of a Little Alsatian

I WAS very late for school that morning, and I was terribly afraid of being scolded, especially as Monsieur Hamel had told us that he should examine us on participles, and I did not know the first thing about them. For a moment I thought of staying away from school and wandering about the fields. It was such a warm, lovely day. I could hear the blackbirds whistling on the edge of the wood, and in the Rippert field, behind the sawmill, the Prussians going through their drill. All that was much more tempting to me than the rules concerning participles; but I had the strength to resist, and I ran as fast as I could to school.

As I passed the mayor's office, I saw that there were people gathered about the little

[187]

5 Alphonse Daudet. “The Last Class The Story of a Little Alsatian” (Five short stories, by Alphonse Daudet. *THE HARVARD CLASSICS SHELF OF FICTION*, VOLUME XIII, PART 4. FRENCH FICTION. New York: P. F. Collier & Son, 1903 / 1917. 電字版

参考のために現代漢訳も見る。

6 (法)阿爾封斯・都德著、劉方訳「最後一課」劉方、陸秉慧訳『都徳小説選』北京・人民文学出版社2010.1。

英訳は、“The Last Lesson”と“The Last Class”のふたつに分かれる。

4と5の英訳は同文だ。刊年をくらべれば、5のハーヴァード HARVARD 英訳のほうが、4のアイヴス英訳よりも早いように見える。ただし、ハーヴァード英訳には英訳者の名前が記されていない。

よって、1フランス語原文、および2マッキンタイア英訳と3レイノルズ英訳、4アイヴス英訳を比較対照する。

sa belle redingote verte, son jabot plissé fin et la calotte de soie noire brodée p. 20

立派な、緑色のフロックコートを着て、細かくひだの付いた幅広のネクタイをつけ、刺しゅうをした黒い絹の縁なし帽をかぶっている*49。12頁

桜田訳は、胸飾り jabot を「幅広のネクタイ」とした。くり返せば、ネクタイも胸飾りのひとつだといえるかもしれない。

注目点はふたつある。「緑色のフロックコート」と「刺しゅうをした黒い絹の縁なし帽」だ。

理由は知らないが、マッキンタイア英訳とアイヴス英訳の表現が違っている。ならべる。

【マッキンタイア】 his beautiful green frock-coat, his finest frilled shirt, and his embroidered black silk calotte p. 3

彼の美しい緑色のフロックコートとすばらしいひだ飾りのついたワイシャツ、そして刺繍をした黒い絹の縁なし帽子

【レイノルズ】 his beautiful green coat, his frilled shirt, and the little black silk cap, all embroidered p. 338

彼の美しい緑色のコート、ひだ飾りのついたワイシャツ、そして小さな黒い絹の帽子、それらには刺繍がされている

【アイヴス】 his handsome blue coat, his plaited ruff, and the black silk embroidered breeches p. 189

彼の立派な青色のコート、ひだ付きのエリ、そして刺繍をした黒い絹のズボン

フランス語原文に対して英訳3種が、微妙にずれている。コートの色が緑色と青色、ワイシャツとひだエリが違うし、帽子とズボンだ。

いつも考える。細かな部分こそが、底本を判別するばあいの手がかりになる。

郭延礼は、黄静英がフランス語から直接漢訳したと思いこんでいる。ゆえに、黄静英がコートを青色に、ズボンにしたのは「誤訳」だと断定した。

以上を見れば、アイヴス英訳のズボンが決め手になる。マッキンタイア英訳とレイノルズ英訳は、両方ともに帽子だ。黄静英漢訳のズボンは、アイヴス英訳にもとづいている。フランス語原文ではない。私は、以上のように判断する。

誤訳したというのであれば、アイヴスがやった。黄静英は、関係がない。

黄静英漢訳を検討する

黄静英漢訳をはじめから検討しなおす。

アイヴス英訳は、副題“The Story of a Little Alsatian (あるアルザス人少年の物語)”をつけている。黄静英漢訳には、ない。削除した。どこが逐語訳なのか。

アメル先生からフランス語について質問され

るはず。少年はおぼえていないので恐ろしかった。

アメル先生 Monsieur Hamel を恩梅爾先生と漢訳したのはよろしい。黄静英は、英訳にもとづいているにもかかわらず、ハメル先生とはしなかった。フランス語を理解している。胡適は、漢麦(ハメル)先生と英語読みをした。それに比較すれば、黄静英漢訳のほうが適切だ。

最初から加筆がある。

【黄静英】先生夙重国文。課授特嚴。予心中惴惴。24-25頁

先生は以前から国語を重んじていて、授業は特に厳しかった。私は心中びくびくしていた。

心中恐れていた、は問題ないだろう。その前の、国語云々はアイヴス英訳にもない。黄静英が書き加えた。ここでいう国語は、フランス語だ。

役場の前を通ったとき、掲示板のそばに人々が立ち止まっている。2年前から悪いニュースはみんなここからやってくる。

【アイヴス】For two years all our bad news had come from that board battles lost, conscriptions, orders from headquarters; and I thought without stopping:

“ What can it be now ? ” p. 188

この2年間、すべての悪いニュースはあの掲示板からやってきた 敗戦、徴兵、司令部からの命令とか。とまらずに考えた。「今度はなんだろう」

【黄静英】予恐此為法蘭西軍隊之敗報。不敢近視。但疾趨而過。25頁

私はフランス軍隊が負けた知らせではないかと恐れた。近寄って見る勇気もなく、ただ急いで通り過ぎた。

徴兵、司令部からの命令などを省略した。敗戦にフランス軍隊とつけたのは、黄静英の加筆だ。すでにここから間違っている。アルザスの少年がフランス軍の負けを心配している。不必要な加筆だ。少年の自問は、削除している。

少年に声をかける鍛冶屋のワシュテル Washter が出てくる。黄静英は、阿魯台と音訳した。「魯」の字で音があわない。誤植かもしれない。現代漢訳では瓦什特とする。

授業の最初は、いつも大騒ぎだ。机を開けたり閉めたり、大声をあげたり、先生が大きな定規で机をたたいて、静かに、と叫ぶ。これがいつもの教室風景である。

黄静英の漢訳がおかしい。原文のとおりにはなっていない。

【黄静英】平時我師在授課時。口講指画。

孜孜不倦。授課畢。恒手執教鞭。跋來報往。視學生有無偷閑者。狀殊嚴厲。25頁

平素私の先生は授業のとき、身振り手振りじゃべり、倦まずたゆまずの状態だ。授業が終わると、いつも教鞭を持って行ったり来たり、学生で怠けている者はいないかと見ている。特に厳格なのだった。

内容を書き換えている。英文では定規としたのを「教鞭」に誤訳している。授業が終わったあとも、教え子たちが教室で学習しているのは、やはり異様だ。これでは逐語訳というわけにはいかない。

アメル先生が特別な衣裳を身につけていることは、すでに述べた。青い礼服と黒い絹のズボンだ。アイヴス英訳にのみ見える表現だった。

普段は見ることのない三角帽を持ったオゼール老人、元村長、元郵便配達夫なども教室にいる。最後の授業は特別だから参観にきた。

黄静英は、「前村長オゼール(前村長沃善)」とした。誤訳である。元郵便配達夫は省略する。

アメル先生は話した。アルザスとロレーヌの

学校では、ドイツ語しか教えてはならないという命令がベルリンからきた。新しい先生が明日来る。今日はフランス語の最後の授業だ。

【アイヴス】Orders have come from Berlin to teach nothing but German in the schools of Alsace and Lorraine. The new teacher arrives to-morrow. This is the last class in French, so I beg you to be very attentive. p. 190

アルザスとロレーヌの学校では、ドイツ語しか教えてはならないという命令がベルリンからきました。新しい先生は明日到着します。フランス語の最後の授業です。どうぞよく注意して聞いてください。

【黄静英】阿爾薩司及羅林兩州所有學校。行將改課德文。柏林教育部中。已下命矣。諸君咸法人而法文之學堂。且終於今日。願諸君整頓全神。聽予講解。25頁

アルザスとロレーヌ両州の全ての学校では、ドイツ語授業に改められます。ベルリン教育部がそう命令を下しました。諸君たちすべてのフランス人とフランス語の学校は、今日で終了です。諸君は全神経を整えて、私の授業を聞いてください。

大筋では、アイヴス英訳にそった漢訳になっているように見える。だが、細部が異なる。新しい先生が明日到着するという急展開が翻訳されていない。アメル先生による最後の授業だと強調される効果が減少した。そのかわりに小さな加筆が大きな違いを生じさせている。

「君たちすべてのフランス人とフランス語の学校は、今日で終了です」

これは、なにか。アイヴス英訳には見られない。黄静英が独自に書き加えた。フランツらがフランス人にされてしまった。彼らがアルザス人であることを、黄静英は忘れたらしい。学校そのものが終わるように漢訳した。事実とあわない。前の部分に、ドイツ語授業に改められる、

とあるのに矛盾する。

たしかに、著者のドーデは、アルザス人があたかもフランス人であるかのように思わせたかった。白を黒といいくるめる力業だ。読者がそう思うように筆をつくした。そこにドーデ「最後の授業」の構造的欠陥がある。作品そのものが成立しない理由だ。

漢訳では、アルザス人フランツらが、なんとフランス人になっている。黄静英の加筆を見ると、フランスから遠くはなれた中国において、時間と空間をこえてドーデの努力は見事に実を結んだ。黄静英は、ドーデの意図をしっかりと受け止め、立派に誤読誤解したということが出来る。おまけに学校までも終了させてしまうとは。アルザスでは学校は続き、ドーデ「新しい先生」が書かれているのが事実だ。黄静英の大きな勘違いである。

フランツは、鳥の巣をさがしたり、ザール川での氷滑りで学校を怠けたこと、文法書や聖書を邪魔だと思ったことを後悔した。黄静英は、この部分を省略した。

アメル先生が最後の授業のために晴れ着をきている、も省略した。そのかわりに「いま領地割譲のため国語を習うことが禁止された。しかし先生はりっぱな徳性でここにいたから、はたしてこの最後の記念があるのだ(今以割地故。禁習国文。而先生盛徳猶在人間。果応有此最後之紀念也)」(26頁)に書きかえる。アイヴス英訳とは、やはり一致しない。

黄静英は原文に縛られず頓着せず、どんどん書きかえる。

フランツ少年は当てられて質問に答えることができない。アメル先生は、少年を責めない。

次の部分だ。

アルザスでは勉強を翌日に延ばすのが大きな不幸だった。ドイツ人から「君たちはフランス人だといいいながら、自分の言葉を話すことも書くこともできないのか」といわれてもしかたがない。フランツたちの両親は、君たちが教育を

受けることをあまり希望しなかった。畑や工場へ働きに出すことを望んだ。

大要以上の部分は、黄静英の漢訳では省略されて次のように書き換えられる。

【黄静英】汝為法人。応不忘法国之文字。我所属望於汝者。不在今日。而在未来。勉哉。26頁
君はフランス人だ。フランスの言葉を忘れてはなりません。私が君に望むのは、今日ではなく未来にあるのです。励みなさい。

ここでもフランスはフランス人だ。アメル先生は、生徒たちの未来に希望をつないでいる。ドーデが書きそうな文章かもしれない。だが、フランス語原文にもアイヴス英訳にもそのような表現は、存在しない。

「母語こそが奴隷となった自分を牢屋から解放してくれる鍵のようなものだ」

ドーデの「最後の授業」において、特に有名な台詞だといえる。ドーデ流「母語が奪われる+祖国愛」を具体化させたこの文句は、世界中を長年にわたって駆け回っている。

黄静英は、ドーデにとって重要なこの箇所を平気で書きなおす。

【黄静英】苟不自亡。決無致亡之道。我阿爾薩司一片土。既為普魯士所有。我優美高上之文字。既不能入学校之功課。然我舌猶存。決不能須臾忘也。我法蘭西創敗之餘。忍辱出此。誰執其咎。我亦不忍指摘。要之我法蘭西人。無一人不当自責也。26頁

自分で滅びなければ、滅びにいたる道は決してありません。わがアルザスの土地は、すでにプロシアの所有となりました。わが優美高尚な言葉は、もう学校の科目になることはできません。しかしわが母語は、まだ存在しています。寸時も忘れてはなりません。わがフランスがはじめて敗れてのち、

ここから屈辱に耐えるのです。誰がその責任をとりますか。私は指摘するのに忍びないのですが、そうならばわがフランス人は、自分を責めてはならない人はひとりもいないのです。

フランスたちアルザス人を含んで、みながフランス人だ。しかも、責任は全員にある。総懺悔にしてしまった。

あの有名な母語についてのドーデの文章（実はフレデリック・ミストラルからの引用）は、わずかに漢訳されて「わが母語は、まだ存在しています（我舌猶存）」へと変身した。黄静英がよったアイヴス英訳193頁の欄外注にはフランス語原文で明示されているにもかかわらずだ。フランス語ができるはずの黄静英は、なぜ無視するか。なぜ省略して書きかえるのか。不可解としかいいようがない。

決まり文句が抜けてしまった「最後之授業」は、ドーデ「最後の授業」らしくない。

文法の説明が終わり、習字練習になった。「フランス」「アルザス」を書いているとき黄金虫が飛び込んできたが誰も気をとめない。ハトが鳴いている。ハトもプロシア語（ドイツ語）で鳴かなければならないのか。フランスがそう思考する箇所に、ドーデのあの奴隷が挿入されている。

【黄静英】我輩既因割地而淪為奴隸。国語且之不之保矣。26頁

私たちは領土割譲のために奴隷に落ちぶれてしまった。国語を守ることができない。

黄静英は、フランスの感想としてこの語句を書き加えた。奴隷部分は、かまわない。後半が問題だ。前述のとおり、ここでいう「国語」はフランス語にほかならない。しかし、「国語を守ることができない」にしてしまっただけでは、奴隷から解放される鍵そのものを失うではないか。黄

静英は、この箇所についてドーデの文章を理解していない。

アメル先生が教壇に坐って周囲を見つめる。樹木が伸びている。先生の妹が2階で旅立ちの荷物整理をして足音が聞こえる。明日はこの土地を去らなければならない。

ここだ。作品の最後部分において、黄静英はアメル先生に信じられない奇妙な行動をとらせる。フランス語原文にもアイヴス英訳にも書かれてはいない。

【黄静英】先生率我等至運動場。俾我輩遊散。自入宅中。拚攜行李。已定於明日永別故郷。移居祖国矣。但聞先生与其妹在楼上蹀躞往来。不久收拾已竟。仍鼓勇入教室講歷史。27頁

先生は私たちをつれて運動場に行き、私たちを散開させた。自分は建物に入り荷物をかたづけた。明日は故郷に永の別れをつけ、祖国に移住することになっている。先生とその妹が階上で行き来するのを聞くだけだ。しばらくするとかたづけが終わった。気を取りなおして教室に入ってくると歴史を講義した。

ドーデの原文では、2階で荷造りをしているのはアメル先生の妹だ。先生とはいえば、教壇で坐って周囲をながめつづけている。これが原作でありアイヴス英訳の本文である。黄静英の漢訳は、それらとは異なる。

黄静英は、アメル先生について誤解をしているのではないか。「永別故郷。移居祖国」がその証拠だ。「故郷」というがアルザスはアメル先生の生まれた土地ではない。長年住み慣れた土地というのであればよるしい。しかし、「祖国」フランスに移住するのは理屈に合わない。書くとすれば、ここは、帰国するだろう。関連するのは、以下のアイヴス英訳部分だ。

【アイヴス】For they were to go away the next day to leave the province forever. p.196

彼らは明日出かけなくてはならない、この土地を永遠に去らなければならない。

黄静英が加筆した「移居祖国」が混乱を引き起こしている。どうやら彼女は、フランスとアルザスの関係を把握していないようだ。

いまさらいうまでもなく、物語の基本はこうだ。

フランス人のアメル先生は、フランスからアルザス地方に派遣されてきている。40年間アルザス人の子どもたちにフランス語を教えていた。プロシアの戦勝、フランスの敗戦によってフランス語の授業ができなくなる。アメル先生は職を失い、アルザスを去らなければならない。明日、フランスへ帰国する。フランス語最後の授業だ。

黄静英は、フランス語(郭延礼による)、英語は理解する。だが、外国の状況には暗いということか。ならば、余計な加筆など控えればよかった。逐語訳になぜ専念しないのか。

そもそも黄静英は、どうしてフランス人たちを運動場に行かせるのか。ここの改変は、どう考えてもその必要がない。アメル先生は、フランスたちに勉強のかわりに花に水をやらせた。自分が魚釣りをしたいために授業を休みにした(この部分は黄静英は漢訳していない)。そういう先生だが、授業を中断して荷造り、とはいくら勝手な人とはいえやりすぎだろう。だいいちこの地方の元有力者を含めた村人たちがおおぜい授業参観にきていることを忘れている。授業を中断することは、彼らを放置することを意味する。不自然だ。黄静英の書き換えは、あきらかに失敗している。

教会の鐘が正午を鳴らし、プロシア兵が演習から帰る。アンジェリユスの鐘は、削除だ。

以上に見てきたのが黄静英の漢訳である。

郭延礼は、黄静英漢訳が逐語訳だという。胡適の漢訳には、削除が多い。その削除部分を黄静英は漢訳している。そう郭延礼は、断言した。ゆえに全文漢訳の最初である、と。

事実が郭延礼の説明を裏切っている。胡適訳にくらべれば、たしかに全訳にはなる。問題はその内容だ。大幅な書き換えをする。削除もしている。残念ながら郭延礼が書くような逐語訳ではない。

私は、郭延礼が示した結論に対して疑問を感じる。胡適漢訳には、たしかに削除が多くあった。それと同じ程度に黄静英漢訳にも大きな書き換えがある。郭延礼は原著(の漢訳)と黄静英漢訳を比較対照したはずだ。書き換えに気づかなかつたとは信じがたい。

私の判断は、こうだ。胡適漢訳と黄静英漢訳は、両者ともにそれぞれが底本とした英語翻訳をはずれている。逐語訳という忠実な翻訳ではない。特に黄静英漢訳を取り上げて称讃する理由は存在しない。さらには、最初の全文漢訳でもないのだ。

そのほか

黄静英の「最後之授課」を論じた専門論文が書かれているかどうかは知らない。上に紹介した郭延礼論文が比較的詳しい。そのほかは、部分的に言及がある。

韓一字『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』*50が、黄静英の漢訳を説明している。すこし紹介しよう。

韓一字は、剣侠「(短篇小説)弱国余生記」(『礼拝六』第46期1915.4.17)を例に出す。黄静英の「最後之授課」は『礼拝六』第42期掲載が1915年3月20日*51だ。ほぼ同時期の作品掲載だと韓一字はいう。その説明は、大要次のようになる。

剣侠「弱国余生記」は、青島における日本軍とドイツ軍の戦いのなかで、家を壊され人が死ぬ惨劇に青島の少年があうことを描いている。

そういう言語環境のなかで黄静英の「最後之授課」は出現した。「ドーデの「最後の授業」を、時局に激しく起こった救亡の合唱に一步参加させた」118頁

ドーデの原作を漢訳したというだけで、ドーデ流「母語を奪われる+祖国愛」を中国の現実に適用させる。そういう読解だといっていいだろう。

韓一字は、歴史事実に対する読みの適用を急いでいる。黄静英の漢訳そのものを検討していない。フランス語原作とアイヴス英訳とは無関係に、黄静英が独自に大きな書き換えを行なった。この事実を知れば、韓一字の考えに変化が生じるだろうか。それとも、書き換えの事実を知ったうえで、そう書くのか。結論が先にあって、黄静英漢訳の内容はどうでもいい、ということになる。(黄静英の項終了。つづく) 罫

参考文献については、神田「早期漢訳ドーデ 胡適訳「最後一課」のばあい」を参照のこと。

【注】

- 44) 韓一字「“陳匪石訳”《最後一課》与胡適訳《最後一課》考略」『清末小説』第25号2002.12.1。同氏同題『出版史料(叢刊)』第3輯2002.9
- 45) (黄)静英女士訳「(普法戦争軼事)最後之授課」『礼拝六』第42期1915.3.20
- 46) 神田「早期漢訳ドーデ「最後の授業」 胡適訳「最後一課」のばあい」『清末小説から』第112-115号 2014.1.1-10.1
- 47) 郭延礼「都徳《最後一課》的首訳、偽訳及其全訳文本」『中華読書報』2008.4.16 電字版
- 48) 同名同文(ただし小見出し付き)、英訳者不記が“THE NEW YORK TIMES”1914年8月23日付電字版に掲載されている(ウェブで確認)次ページ参照
- 49) 日本語訳は、ドーデー作、桜田佐訳「最後の授業」『月曜物語』岩波書店1936.2.10 / 1989.1.5五十二刷 岩波文庫
- 50) 韓一字『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6
- 51) 韓一字117頁では3月27日に誤る

清末民初俄国小说译介路径综考(下)

付 建 舟

三、其他底本译介路径的俄国小说考述

除了以日译本、英译本为底本外，有的俄国小说汉译本还以德译本、法译本甚至俄文本为底本。清末民初，中国译者懂德语、法语、俄语的远远少于懂日语与英语的，因而这种译介路径的作品不多，但很有意义，它表明这一时期俄国小说汉译本译介路径的多样性。笔者所知的几部(篇)译作如下：

1909《域外小说集》(周树人所译俄国小说部分)，周氏兄弟译，1909年先后分两册在日本东京出版，1921年两册合订并增补21篇由上海群益书局出版。(前者未见)

1914《心狱》(今译为《复活》)，俄国托尔斯泰著，马君武译，上海·中华书局1914年9月初版，1916年9月三版，《小说汇刊》之一。

1915《绿城歌客》(今译为《卢塞恩》)，俄国托尔斯泰著，马君武译，《大中华杂志》第1卷第7、8期(1915年7月20日至8月20日)。

1918《金台春梦录》，法国丹米安、俄国华伊尔原著，林纾、王庆通译述。《说部丛书》四集系列第三集五十编，中华民国七年(1918)八月初版，中华民国九年(1920)八月再版。

为数不多几位译家如周树人(鲁迅)、马君武、王庆通(合译者林纾)各具特色。周树人早就“弃医从文”，决定毕生以文学为业。马君武

虽不以文学为业，却抱启蒙大志从事域外小说翻译。王庆通精通法文，汉文水平不足而与林纾合译。周树人曾自学德文，偶习俄文，其德文水平远高于俄文水平。《域外小说集》收入了他翻译了三篇作品，即迦尔洵的《四日》、安特来夫的《谩》与《默》。有人认为“鲁迅据德文转译”^{*21}，权从其说。马君武曾留学日本、德国，精通英、日、德、法等国文字，涉及自然科学、社会科学诸多领域。他翻译了不少外国著作，所用底本可能不限于一种文字。翻译域外文学作品是他的业余爱好，其意不在消遣，而在于启发民众。在译诗《哀希腊》之首，马君武说，“非知英文”的梁启超曾赖其徒罗昌口述曾译二章，自己省母时“间取裴伦诗读之，随笔译之”^{*22}。由此推测，《哀希腊》以英文本为底本。在瑞士，他利用闲暇时间翻译德国席勒的戏曲《威廉退尔》，他在《译言》中说，不能把此曲仅仅做戏曲读，“实可作瑞士开国史读”^{*23}。德语是瑞士的四种国语之一，是大多数国民的母语，马君武汉译时可能以德文本为底本。马君武还翻译了托尔斯泰的短篇小说《绿城歌客》，在《译言》中说：“此书虽记绿城一夕之事，而要为主张人道最力之书”^{*24}。寥寥数语，要言不烦，画龙点睛。但不知他汉译时所据底本。关于马君武翻译的《心狱》，有人说：“1907年6月，上海商务印书馆出版了马君武从德文转译的《心狱》(《复活》节译)”^{*25}。今从其“从德文转译”之说，“1907年6月，上海商务印书馆出版”则不敢苟同。王庆通精通法语，兼及英语，但其文学素养没有达到独自翻译小说的程度。他与林纾合译的作品有九部收入《说部丛书》中，包括法国大仲马的《蟹莲郡主传》、法国爽梭阿过伯的《潮中花》、法国辟厄略抵的《鱼海泪波》、法国小仲马的《鹦鹉缘》与《香钩情眼》、比利时恩海贡斯翁士的《孝友镜》、法国丹米安、俄国华伊尔合著的《金台春梦录》以及英国卡叩登的《莲心藕缕缘》，其中大部分是法国小说，《金台春梦录》的翻译可能是以法文本为底本。

《昙花梦》是一本未署原著者和译者的汉译本，颇值得玩味。这部译作如下：

1906《昙花梦》，未署原著者，商务印书馆编译所译述。《说部丛书》四集系列初集第二十三编，上海商务印书馆丙午年（1906）四月初版、中华民国三年（1914）四月再版。封面题“义侠小说”，正文题“社会小说”。

这是一部关于虚无党题材的小说，未署原著者。不过，其副文本提供了有价值的信息。正文前译者撰写的“译语”说，李某从俄国首都归来，访予于钱塘，予询问李某虚无党情状，李某“因出小册示予，则萨拉斯苛夫所纪月莲风莲事，风莲为萨氏妻，故纪述甚详，而又曲尽”^{*26}。正文卷首“引言”亦云：“昙花梦者，萨拉斯苛夫自悼其亡妻风莲而作也”^{*27}。由此可知，《昙花梦》的原著者为俄国的萨拉斯苛夫（Saltykov 1826-1889）。萨拉斯苛夫被誉为十九世纪中期俄国三大文豪之一，与陀思妥耶夫斯基和托尔斯泰齐名^{*28}。由此推测，《昙花梦》可能以俄文本为底本，由李某口述，“译语”的作者笔录，二人合作完成。该译本因译者不拥有著作权而署“商务印书馆编译所译述”，与《不测之威》的署名一样。

四、不明底本的俄国短篇小说译作考述

有些俄国小说汉译本所据底本不详，除了两部^{*29}外，几乎全部是短篇小说。其中托尔斯泰的短篇小说与故事译作45篇（则），屠格涅夫的6篇，契诃夫的26篇，普希金的2篇，高尔基的6篇，安特莱夫的1篇，其他作家的10篇，合计96篇（则）。

托尔斯泰的短篇小说译作包括《复活记》（1913）、《尔之邻》（1914）、《小儿与成人》、《魔针》（1914）、《俄皇与里衣》（1916）、《富》（1916）、《谁之罪》（1918）、《尼哥拉二世之梦》（1918）、《三问题》（1919），此外还有以下作品：

1909《愚国誌》，署“俄国大文豪托尔斯泰著”，未署译者，连载于《民呼日报》1909年5月31日（农历己酉年四月十三日）-6月6日（农历四月十九日），6月8日（农历己酉年四月廿一日）-6月11日（农历四月廿四日）。题“欧美名家短篇小说”。

1914《六尺地》，俄国大文豪托尔斯泰著，包天笑（包公毅）译，《小说月报》5卷2号（1914年5月25日）

1914《黑狱》，俄国托尔斯泰著，（周）瘦鹃译，《礼拜六》4期（1914年6月27日）。题“社会小说”。

1914《此何故耶》，俄国托尔斯泰著，半依（刘半农）译，《中华小说界》第1年第11、12期，1914年11月1日至12月1日。题“哀情小说”。

1915《伊里亚》，俄国托尔斯泰著，愿深、瓶庵译，《中华小说界》2年4期（1915年4月1日），题“讽世小说”。

1915《嗟乎梭伦》，俄国托尔斯泰著，愿深、瓶庵译，《中华小说界》2卷7期（1915年7月1日），题“哲理小说”。

1915《如是我闻》，托尔斯泰著，半依（刘半农）译，《中华小说报》第2卷第11期（1915年11月1日）。题“社会小说”。

1916《复活》，俄国托尔斯泰著，剑平译，《礼拜六》96期（1916年4月1日）。题“言情小说”。

1916《情感》，俄国 Zolstoi（托尔斯泰）著，建生、迪士译，《小说时报》第28期（民国五年九月）。题“短篇名译”、“哲理小说”。

1916《托氏寓言集》，俄国托尔斯泰著，杨克念译，《清华周刊》第85-87期（1916年11月1日-15日）、第88、89期未载，第90、91期（1916年12月7日-14日），第92期（未见，不知是否刊载），第93期未载，第94、95期（未见，不知是否刊载），第96期（1917年2月15日），凡25则。

1917《宁人负我》，俄国托尔斯泰著，周瘦鹃译，《欧美名家短篇小说丛刊》1-3集，上海·中华书局1917年。

1919《空大鼓》，俄国 L. Tolstoy 著，周作人译，《新青年》，5卷5期（1918年10月15日）。

屠格涅夫的短篇小说译作篇目为：

1915《杜瑾讷夫之名著》，署名“半依”，《中华小说界》第2卷第7期（1915年7月1日）。题“名家小说”。

1916《初恋》，俄国屠尔格涅甫（屠格涅夫）原著，陈赅节译，《青年杂志》第1卷第5号（1916年2月）至《新青年》第2卷第2号（1916年10月1日）。

1917《死》，杜瑾纳夫（屠格涅夫）原著，周瘦鹃译，《欧美名家短篇小说丛刊》1-3集，上海：中华书局1917年。

契诃夫的短篇小说译作篇目为：

1910《六号室》（今译为《第六病室》），俄国文豪奇霍夫（契诃夫）原著，天笑生（包天笑）译，《小说时报》第1年第4期（宣统二年三月朔日即1910年4月10日）。题“短篇小说”，实际上是中篇小说。

1916《风俗闲评》（短篇作品集，23篇），俄国契诃夫著，陈家麟、陈大镫译，上海中华书局，1916年11月。

1919《可爱的人》（今译为《宝贝儿》），俄国 A. Tshekhov 著，周作人译，《新青年》第6卷第2号（1919年2月）。

1919《这样就是名誉！》，俄 ANTON CHEKHOV 著。今非译，《太平洋》第2卷第1号（1919年11月5日）。（未见）

此外，还有普希金的《神枪手》（1911）与《棺材匠》（1912），安特莱夫的《红笑》（1917），高尔基的《二十六人》（1916）、《大义》（今译为《叛徒的母亲》（1917）、《他的情人》（1919）、《苦自觅儿与露开儿》（1919）、《一个病的城里》（1919）、《私刑》（1919），以及其他作家的《勇奴》、《沙场归梦》、《爱国真诠》、《火车客》、《孝子碧血记》、《决斗》、《童子 LIN 之奇迹》、《皇帝之公园》、《铁圈》、《齿痛》等短篇译作。

托尔斯泰在清末民初时期的影响很大，批评家认为，“俄国托尔斯泰，本其悲天悯人之怀，著为小说，蔼然仁人之言，读之令人泪下而不自知，如此何故耶？林译《人鬼关头》、《恨缕情丝》等，皆至情至性，溢于纸上，无怪一编脱稿，万国转译，盛名固不易幸致也”^{*30}。不管是晚清新小说批评家还是五四新文学家与新文学批评家都比较注重托尔斯泰的人道主义精神。《杜瑾纳夫

之名著》由刘半农所译，包括《乞食之兄》、《地胡吞我之妻》、《可畏哉愚夫》、《婆妇与采汁》。译者自注曰：“俄国文学家杜瑾纳夫，与托尔斯泰其名……”。此前托尔斯泰在中国读者中就颇有声誉，他把屠格涅夫与托尔斯泰齐名，有助于读者更好地认识屠格涅夫。这些短篇小说译作呈现出显著的特点，除了少数几篇外，绝大多数译介于民国初期数年。这与民初短篇小说创作高潮相辉映。从文学史的角度来看，民初的短篇小说译作促进了民初的短篇小说创作，为五四时期短篇小说创作奠定了深厚的基础，促进了中国短篇小说创作的现代转型。

综上所述，清末民初俄国小说汉译本主要来自日译本与英译本译介路径，极少数出自德译本、法译本或俄文本译介路径。这些译作主要是长篇小说与短篇小说两大类，也包括少数中篇小说。长篇与中篇小说译作共有17部，多为单行本，一般事先在报刊上连载后出版。短篇小说往往散载于各种报刊，有的输入集子，有些自成专集。这类译作大约有141篇（则）。这一时期的汉译俄国小说绝大多数是近代俄国名家名作，如普希金的《上尉的女儿》，屠格涅夫的《春潮》，莱蒙托夫的《当代英雄》，托尔斯泰的《安娜·卡列尼娜》、《复活》，契诃夫的《第六病室》，安特莱夫的《红笑》，高尔基的《鹰之歌》，这是一种十分突出的现象，它与同一时期的英法译作大多数是二三流作家的二三流作品迥然不同，前者的启蒙成分很重，后者的消遣色彩很浓，二者形成鲜明的对比。

清末民初域外小说之汉译与甲午战争密切相关。甲午一役可谓中国近代历史的转折点，北洋水师全军覆没，朝野震惊，开明官僚与有志之士开始寻找救国之道。明治维新可谓日本近代历史的转折点，此前日本一直学习中国文化，此后以西方为师，脱亚入欧，逐渐完成国家的现代转型，成为中国学习的榜样。在寻找救国之道的课题上，政界与知识界很快获得共识，即通过日本全面学习西方政治、经济与文化。张之洞曾在《劝学

篇》中指出，留学之国，西洋不如东洋，“一路近省费，可多遣；一去华近，易考察；一东文近于中文，易通晓；一西书甚繁，凡西学不切要者，东人已删节而酌改之。中东情势风俗相近，易仿行，事半功倍，无过于此。若自欲求精求备，再赴西洋，有何不可？”*31。于是，官派留日学生启动，并促进自费留日，由此掀起留日浪潮。同时，留学欧美的学生也逐渐增加。创办报刊，译介西籍是留学生的一项重要任务，所译西籍从西方哲学社会科学、自然科学，迅速发展文学，尤其是小说。出自日译本译介路径的俄国小说并不多，数量远不及出自英译本译介路径的译作，这与当时日本的俄语人才相对缺乏有关。日译本的译者比较集中，有迹可求；英译本的译者比较广泛，踪迹难寻。但是，我们不能以此抹杀日译本译介路径的重要性。总之，俄国小说汉译本具有鲜明的特点，其突出表现是日译本译介路径的重要性，英译本译介路径的丰富性，其他底本译介路径的多元性，以及汉译本译者的广泛性与复杂性。 ㊦

【注】

- 21) 止庵：《总序》，《域外小说集》，北京：新星出版社，2006年，第2页。
- 22) 《马君武诗稿》，出版社不详，1914年6月版，第20页。
- 23) 马君武：《译言》，《威廉退尔》，《大中华杂志》1915年第1卷第1期，第1页。
- 24) 马君武：《译言》，《绿城歌客》，《大中华杂志》1915年第1卷第7期，第1页。
- 25) 高荣国：《晚清民初时期托尔斯泰作品的译介路径、原因及其误读》，《外国文学研究》2013年第3期，第120页。
- 26) 《译语》，《昙花梦》，未署原著者，商务印书馆编译所译，上海商务印书馆1914年再版，第1页。
- 27) 《引言》，《昙花梦》，未署原著者，商务印书馆编译所译，上海商务印书馆1914年再版，第1页。
- 28) (日)升曙梦著：《现代俄国文艺思潮》，陈俶达译，上海华通书局，1929年，第39页。
- 29) 其一为《蛾眉之雄》(一题《柔发野外传》，俄国托尔斯泰原著，热质译，宣统三年(1911)拜经室刊，二

- 册)(未见)。其二为《心》(俄国痕苔(安特莱夫)原著，冷(陈景韩)译，《小说时报》第1年第6期(宣统二年七月朔日即1910年8月5日)。题“长篇名译”。)
- 30) 转引自阿英：《阿英文集》，三联书店1981年，第726页。
- 31) 苑书义等主编《张之洞全集》第十二册，石家庄：河北人民出版社，1998年，第9738页。

『明清小説研究』2014年第3期(総第113期)
 2014発行月日不記
 俠義公案小説の界定与源流.....羅立群、劉華
 晚清《京話日報》(1904-1905)所刊
 五種小説研究侯曉晨
 清末民国旗人報刊小説家程道一考論.....李玉宝
 海上漱石生著述考段懷清
 論梁啓超的個性人格与小説界革命之關係
鄒曉霞

商務版「説部叢書」研究の昔と今3(下)

改組の時期

樽本照雄

日本における研究

あとまわしにしてしまった。本来ならば、次の中村論文を最初に説明したほうがわかりやすかったか。中国人研究者たちが、研究の遠回りをつづけ、しかも途中までしか到達していない。その原因は、中村論文を知らないからだ。

中村忠行「商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ」(1981)*¹³である。1981年という早い時期に執筆されている。日本で公表された。しかも「文化大革命」が1976年に終了してわずかに5年しか経過していない。中国人研究者が該論文の存在を知らない理由だろう。まあ、当然か。中国には日本の清末小説研究に注目する研究者はごくわずかしかいない。一般の研究者が知らないのは、残念なことだが、不思議ではない。長年の経験からわかる。

商務印書館「説部叢書」研究における最初の記念論文だ、と私は考える。多数の表紙写真を掲げてその変化を明解に説明している。最初にして詳細だ。内容は豊富で広がりをもち、存在する問題のほとんどを提出している。中村忠行が彼の約50年間を費やし追求しつづけたその結果を、一気に公開した。中村忠行による「説部叢書」研究の集大成だと私は見ている。「説部叢書」に関して、それまで研究者の誰も書いたことのないすぐれた論文である。だからこそ、私はなんども紹介する。

中村論文については、前稿で要約した。ここでは、本稿に関係する重点だけを抜き出して結論を掲げる。

1 元版と初集本の2系列にわかれる。(中村が与えたこの呼称を樽本が継承している)

2 元版所収の『佳人奇遇』『経国美談』は、『天際落花』『劇場奇案』に差し替えられた。(改組である)

3 別作品の移動を行なっている。

4 初集と改称したのは、商務印書館が金港堂との合併を解消したのがきっかけだ。

中村論文は、「説部叢書」研究の最深部まで到達している。理解度第4層に置く理由だ。

あらためて指摘する。重要案件だといいたい。作品を差し替えて改組したこと、および初集と改称したことの2点である。

日本では、中村論文につづくのが樽本「商務印書館版「説部叢書」の成立」(2002)*¹⁴だ。

拙論の内容を以下のように要約する。

商務印書館の翻訳シリーズ「説部叢書」は、有名であるが、その成立について論じた論文は、多くない。日本ではわずかに中村忠行が文章を発表しているだけだ。中国では、「説部叢書」の存在を紹介するだけの短文がようやく執筆されるという寂しさである(注:陸昕2001のこと)。資料上の制約があるのかどうか、詳細は不明だ。本論文は、中村論文よりもより詳細に、原物の書影をかかげながらその成立過程を述べる。略論すれば、最初は、商務印書館に「説部叢書」刊行の構想はなかった。漢訳作品が増加するにしたがってそれをひとまとめにすることにした。第一集から第十集まで各十編で全一百編とする。元版である。そののち、表紙をタンポポ文様に統一する。前後して作品を入れ替えた改組を実行した。さらに数年後、元版一百編を初集と改称して表紙をリボン文様に一新する。金港堂との合併解消を記念して1914年に全部を再版する。結局のところ第4集22編を発行して終了した。その成立過程は、単純ではないのだ。

以上で要約終わり。

樽本2002は、陸昕2001が公表されたあとに書

かれた。中国に見るべき「説部叢書」研究がない、という状況であったことを今さらながらに感じる。

第一集第一編『佳人奇遇』を『天際落花』に、第一集第二編『経国美談』を『劇場奇案』に入れ替えて改組は1908年だ、と推測した。ただし、それを証明するタンポポ文様の実物がでてこない。これが、私の疑念を引き出した(後述)。

問題を整理しなおして次の論文を書いた。

樽本「商務版「説部叢書」研究の昔と今1

不思議な版本」(『清末小説から』第103号 2011.10.1、1-11頁。要約：商務印書館版「説部叢書」に収録された不思議な版本を紹介する。その前に、「説部叢書」の成り立ちを研究した日中の研究を見る。中村忠行論文が早くに、詳細に論じていることを指摘する)

樽本「商務版「説部叢書」研究の昔と今2

不思議な版本」(『清末小説から』第104号 2012.1.1、1-9頁。要約：集編番号が同一である版本は、存在しないはずだ。しかし、『吟辺燕語』と『金銀島』が同一。『金銀島』が間違っている。なぜかはわからない。また、『寒桃記』の集編番号を で塗りつぶす版本がある。塗りつぶしていないものも実在する。こちらの理由も不明。不思議な版本があるものだ。以上の事実は、商務印書館編訳所の刊行物管理が厳格ではないことを示唆している)

その他いくつかの問題に言及した。その中でいまだに疑問のままに引き続いていることがある。作品を入れ替えて改組したのはいつか。最後に残った課題だ。

改組時期 問題を絞り込む

「説部叢書」の成立経過を今一度確認したい。改組の時期に焦点を合わせている。それ以外は省略した。

先元版とは、商務印書館が刊行したバラバラの翻訳作品を指す。その時点では、まだ固有名詞「説部叢書」の名称は与えられていない。

1903年より表紙に「説部叢書」と明示する元版が出現する。第一集十編、第二集十編と継続

出版する。

1905年、表紙をタンポポ文様に統一し叢書としての一体感を演出した。

1908年、2作品を入れ替え改組する。

改組と同時に元版十集全一百編が完結する。まとめて箱売りをしたのは1908年、1909年、1911年のことだ。

1913年、初集と改称し、統一番号に振り直し全100編とする。表紙をリボン文様へと一新する。

1914年、初集100編全部を再版する。商務印書館が金港堂との合併を解消した記念だ。

以上が、「説部叢書」成立の経過であり、元版から初集本への変更だ。

改組について、当時は上記のように1908年だろうと推測した。その根拠は、差し替えられた『天際落花』(戊申五月(1908)/1914.4再版)と『劇場奇案』(戊申六月(1908)/1914.4再版)の刊行年だ。両書ともに初集本の奥付刊年を示した。それらに印刷された初版らしい刊年を信用すれば、改組は戊申1908年になる。

その1908年が、私の中ではブレはじめた。

ひとつの理由は、元版の初版(戊申五月、あるいは同年六月)が見つからないからだ。

説明する。

1914年に再版した初集は、その奥付に初版の刊年を記載する。しかし、それが正しいかどうかはわからない。ここが重要だ。

戊申初版と表示していても、以前の「説部叢書」であるとは限らない。別の叢書、あるいはたんなる単行本である可能性を否定することができない。周作人『匈奴奇士録』の例がある。また、誤植があるかもしれない。全部が正確に初版刊年を印刷しているとは保証のかぎりではない。再版本で、さまざまな記述を見た経験からいっている。だから、ここはぜひとも戊申1908年「説部叢書」初版タンポポ文様本を確認する必要がある。

1908年初版本が確認できない。考えがブレた原因だ。今から思えば、資料が不足していただけだった。

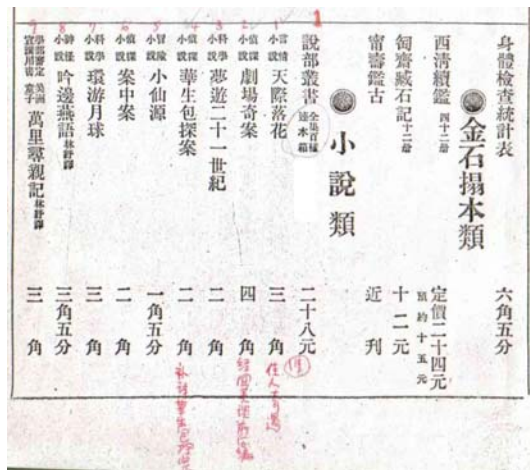
くりかえす。『天際落花』と『劇場奇案』が1908年に差し替えられたならば、元版タンポポ文様の版本があるはずだ。しかし、それが見つからない。一方で、上にあげた1914年再版本の初集リボン文様は、容易に見ることができる。迷ったすえに、以前の改組1908年説を1913年に考え直した。

決め手の証拠となる実物の元版タンポポ文様本が、出てこない。これは、私にとっては大きな問題だ。「説部叢書」の実物は、現在はほとんど市場で見かけない。

私は、手元にある資料に基づいて判断している。状況を考慮し推測する。そう考えるのが合理的であれば、そう書く。新しく資料が出てくれば、それに合わせて変更する。それが私のやり方だ。このばあい、元版タンポポ文様本の欠如不在が、1908年から1913年へ考え方を変えさせた。

ただし、1913年改組説に変えると説明できないことがひとつ発生する。そのことも明記している。

『東方雜誌』第8巻第1号(1911.3.25)に商務印書館の自社広告が掲載されている事実だ。



『東方雜誌』第8巻第1号

「説部叢書」として掲げられた書名には、改組後の作品が見える。1913年改組説に考えを変えると、広告の1911年当時、それらは実行されてはいないはずだ。前稿注8において、少し長

い注釈を書いた。広告を全面的に信用するのは危険だ。しかし、まったく無視することもできない。改組を1913年だとすれば、広告の記事と矛盾する。説明できない。1908年であれば、問題はない。しかし、元版の実物が見つからない。そこを巡るだけ。

改組年の確定

待ったかいがあった。探していた本が、出てきたのだ。写真ではあるが、なによりの資料だ。前出の付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』(2013)である。

「説部叢書」元版タンポポ文様『劇場奇案』1908年初版が掲載されている。25頁の表紙写真には、タンポポ文様に第一集第二編と明記してある。26頁の奥付写真を見れば「光緒三十四年六月初版」だ。1908年に改組された決定的な証拠である。

私は、見た瞬間に理解した。これこそが私の求めていた元版の初版そのものである。清末小説研究会ウェブサイトのように報告したのだった。



付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』より引用
2013.5.22

商務版「説部叢書」改組に関する重要な版本が出現しました。

今まで不明とせざるを得なかった改組の時期を特定することができます。

こうして本稿を書いている。

「説部叢書」元版は、改組して作品の差し替

えを実行した。第一集第一編『佳人奇遇』は『天際落花』になる。第一集第二編『経国美談』は、『劇場奇案』(光緒三十四年六月)である。タンポポ文様の元版だ。

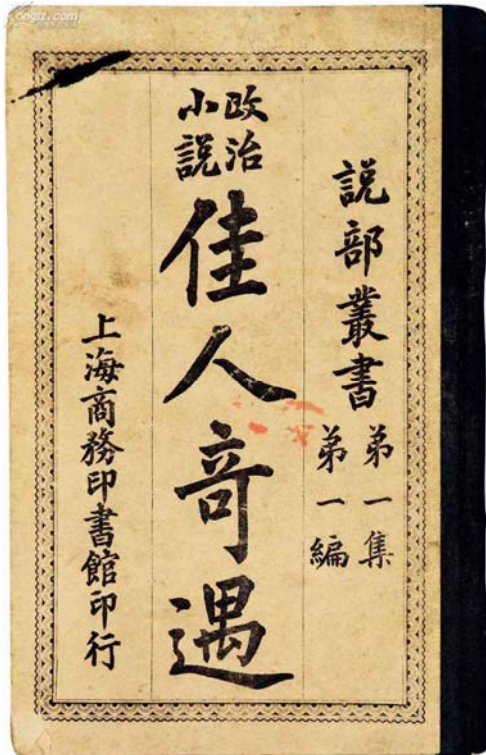
改組の時期は、光緒三十四年(1908)で間違いはない。結局のところ、もとの推測にもどって落ち着いた。

付建舟は、該書において写真を示してはいる。だが、改組について何も説明していない。改組そのものを知らないからだろう。

なお、該書についてウェブで検索すると上海図書館所蔵の1本がある。付建舟が写真にかかげた表紙には、上海図書館の蔵書印が押されている。

「説部叢書」成立経過に関する「表」を修正して本稿末尾に掲げる。

なお、ついでながら、上に示した第一集第一編『佳人奇遇』、つまり元版1型aの書影を掲げよう。



孔夫子旧书网より引用

「説部叢書」本であるところが珍しい。元版1

型aの『経国美談』と同じ意匠だ。私は見たことがなかった。

2010年、孔夫子旧书网の競売に出品された記録が残っている。刊年不記らしい。出品書店が、民国刊行だと誤って説明している。それくらい見かけない版本だということができよう。

上に示した『佳人奇遇』と同じ写真が、關文『晚清報刊上の翻訳小説』(済南・齐鲁書社2013.5。41頁)にも見える。左上のキズが一致するから同一版本だとわかる。ただし、文は、何も説明していない。43頁ではその刊年を光緒二十七(1901)とするが、根拠不明。

中国における最新の研究

鄒瑞珩「“説部叢書”的胸懷」*15が新しい。内容を紹介しながら検討する。

1 商務印書館が発行した最大規模の叢書だという。1903年から1924年まで、全部で220部あまりの作品を出版した(173頁)。

筆者注：最初から奇妙なことが書いてある。

「220多部」とはなんだろう。「320多部」の間違いだろう。また、177頁には323種とも記述する。根拠が不明。事實は、第4集第22編『情天補恨録』(1924)が最後の作品だ。普通は全322編(種)といっている。なぜ数字が一致しないのか不明だ。さらに174頁で、第四集は23編のみという。22編の間違い。こまかな数字の違いに過ぎない。だが、客観的な数字だから一致させるべきだ。「説部叢書」の開始を1903年とする。該書の別の箇所では、周羽が『佳人奇遇』について「1902年此書又編入商務印書館「説部叢書」」(133頁)と書いている。『経国美談』でも同様に1902年とする(134頁)。執筆者どうして調整はしなかったのだろうか。

2 全体を2種、つまり2系列に分ける。鄒瑞珩はそれらについて名称を与えていない。しいていえば、「第一種」(173頁)と「新出」だ(174頁)。

筆者注：私がか中村論文から呼称を受け継いだ元版と初集本に当たる。黄憚は乙甲、付建舟のいう十集系列と四集系列になる。便利な名称が、

それも複数あるのに、先行文献を読んでいないのかと疑う。あるいは、ただ無視したかった。

3 「説部叢書」は、偵探小説が最も多く、言情小説がそれに次ぐ。この2種類で全体のほぼ半分を占める(174頁)。

筆者注：角書を抽出してそう説明している。何を見たのか知らないが(典拠を明示していない)、数えたのだらう。だが、角書で小説内容を分類するのは、少々危険だ。角書をつけない作品はどうするのか(『商務印書館図書目録』には全作品に角書を明示している。ただし、実物とは異なるばあいはいくつもある。鄒瑞珩が見たのは、この図書目録だろうか)。叢書全体の約39.3%には角書の明示がない。それしか手がかりがない、というのならしかたがないが。私が見れば、角書のついた作品で偵探と言情、それに類似する婚事、愛情、写情、艶情、哀情を含めて、約43.8%を占める。全体からすれば、26.6%にしかならない。「この2種類ではほぼ半分を占める(両類相加総共占一半左右)」というのは誇張にすぎる。「説部叢書」は、偵探と言情が特色だ、と誤った印象をあたえる。

4 「双包案」を出す(174頁)。

筆者注：黄暉が以前に提起した。復習する。同一作品が、(乙系列)第五集第七編と表示し同時に(甲系列)初集第四十七編でもある。重複しているから事件だ、と彼はいった。元版(乙系列)と初集本(甲系列)に作品が重複する。当たり前のごとで事件ではない。事件と考えるほうがおかしい。

鄒瑞珩がここで指摘するのは、黄暉とは異なる事柄だ。すなわち、第一集第二編には、『経国美談』と『劇場奇案』がある。ゆえに「双包案」だ。第一集第二編に2作品が重複するところに注目した。鄒瑞珩が「双包案」だと説明する理由だ。

私の見方は、それとは違う。これは、作品の入れ替えであって「重複事件」ではない。鄒瑞珩は、黄暉の用語を使用して勘違いしているのではないか。それと同時に、作品の入れ替えが改組であることを鄒瑞珩は認識していないこと

を示している。「事件」だといいいながら、それが意味する重要事項を見逃した。

鄒瑞珩論文を最初から順に見ている。細部がしっかりとこない。なぜそうなっているのか。考えるに、たぶん「説部叢書」の成立過程を把握していないからだろう。

5 「説部叢書」の位置づけを欧米大衆文学(欧美通俗文学)に定める。しかし、大量の名著を収録する。

筆者注：前者は、一般的な見方だと思われる。後者は、具体的な作品名を列挙しているから納得がいく。

6 『媒孽奇談』の原著者と原作を夏洛蒂・勃朗特『簡・愛』と指摘する(175頁)。

筆者注：この指摘は、新しい。その表示から、シャーロット・ブロンテ Charlotte Brontë『ジェイン・エア Jane Eyre』1847だとわかる。

鄒瑞珩は、当時の翻訳を以下の3点に特徴づける。

特徴1 名家の名作も物語性を優先し、脚本、伝記も小説として翻訳した。

特徴2 原作が各国語で書かれていようが、翻訳家の限界から多くは英訳本あるいは日本語訳本からの転訳だ。小さな誤りが大きな誤りをもたらした。

特徴3 当時の翻訳小説は多くが意識を採用した。

その通りだろう。商務印書館「説部叢書」に限っての傾向ではない。

特徴1の、脚本も小説として翻訳した、とはなにか。おそらく林紘らが漢訳したシェイクスピアものを指している。だが、これが誤りであることは、すでに明らかにされている。林紘らが底本としたのは、もともと小説化されている作品だ。漢訳して小説になるのは不思議なことではない。また、訳者らの無知からくるものでもない。物語性を優先したわけでもない。鄒瑞珩は、先行論文を追跡する力が弱い。そこは袁進主編がのりだしてきて指導すべきところだった。

鄒瑞珩が「説部叢書」のなかに占める林訳小

説の多さを指摘するのは従来通りかもしれない。ただし、一歩進めて林紘が「説部叢書」全体の水準を推しあげたし、叢書の読者群の数と水準を高めたと指摘する。林訳小説を肯定的に評価していることを記しておく。林紘が再評価されつつある学界の動きに反応しているのだろう。

鄒瑞珮論文は、「説部叢書」の成立経過については執筆の重点をおいていない。論文の重点でないのは、かまわない。しかし、基礎的な知識は持っている必要があるのではないか。先行論文もいくつか発表されているのだ。

「説部叢書」がどのように形成されたのか、諸論文がそれをどれだけ把握して説明しているか。本稿の目的は、そこを点検するところにある。鄒瑞珮は作品の入れ替えに言及するが、それは注の部分においてであって、重要視はしていない。ましてや、改組の事実にも気がついていない。改組時期が問題の焦点になっているという認識もない。せいぜいが元版と初集本に分かれているという程度だ。理解度第3層にとどまらざるをえない。

祝均宙「説部叢書」*16が短文ながら説明している。

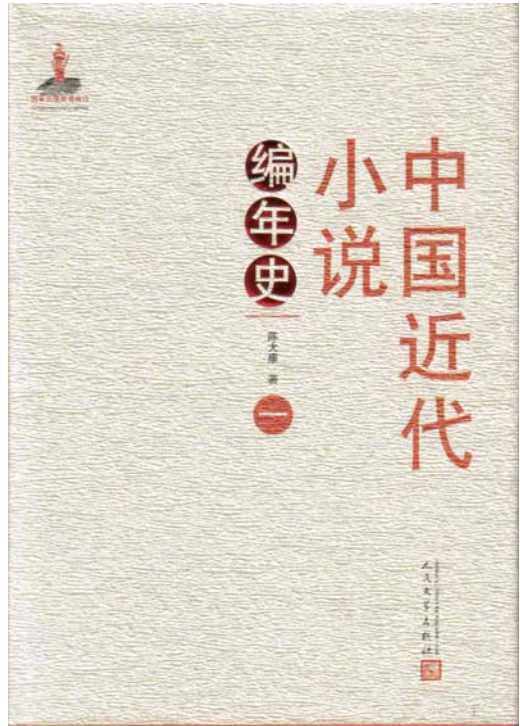
祝均宙は、ふたつの段階に分ける。以下のとおり。一部、漢数字とアラビア数字で書き分けた。

第1段階は1903年4月から1912年まで。十集で92種の小説を刊行した。第2段階は1913年から1924年まで。4集で全322種だ。第1段階の第一集は、政治小説の『佳人奇遇』と『強国美談』(祝均宙は該書において、すべて誤記している)の2種類だ。

拠った資料は、『中国近代現代叢書目録』だけだと推測できる。と書けば、氏に失礼だ。なぜなら、氏は上海図書館に勤務していた。上海図書館の蔵書で見たはずだ。ただし、第1段階の開始を新暦「1903年4月」からとしたのも該目録に基づくだろう。ここに祝均宙の誤解がある。該目録では、「1903年」は新暦で「4月」は旧暦を示す。祝均宙は、それをそのまま新暦だと考えた。また、彼は、先行論文をなにも参照しな

った。

本稿で使用している元版が祝均宙の第1段階に、初集本が第2段階に相当する。評価は、理解度第3層である。



陳大康著『中国近代小説編年史』全6冊*17(『編年史』と略す)という年表が、いちばん新しい。

陳大康著『中国近代小説編年』(上海・華東師範大学出版社2002.12)を大規模に拡大した。全6冊で3千頁をこえるから、資料を大量に収集して詳細になっている。『編年史』については、別に詳しく紹介するつもりだ。本稿では、商務版「説部叢書」関連部分を簡単に取り上げる。

結論だけをいう。

陳大康は、商務版「説部叢書」についての基本的な知識を持たない。彼の研究蓄積と業績の少しを知っている私は、落胆する。

近代翻訳小説では、はずすことのできない商務版「説部叢書」だ。先行文献も、すでにくつかある。だが、『編年史』に出てくる商務版

「説部叢書」は、それらとは無縁である。つまり、研究もしなければ、吸収もしていない。

私が基本だというのは、元版と初集本の区別をつけることだ。1913年に元版を「初集」へと改称した。ここが知識の分かれ目だと以前から指摘している。

陳大康が著わした全6冊の巨著は、その収録対象を「近代小説」すなわち、1840-1911年に発表された小説に限定している。ならば、商務版「説部叢書」は、元版である。第一集から第十集までの全一百種だ。1913年に改称した初集100種が出てくるはずがない。初集と書けば、間違いにきまっている。

1例のみを示す。

1904年に出た『環遊月球』は、元版の「説部叢書」第一集第七編である。これについて陳大康は744頁([編年 744])で次のように書く。

「此為《説部叢書》初集第七編」のちの初集本にしてしまった。誤りである。これでは、彼の認識は第2層でしかない。

以上を見ての私の感想だ。中国の研究者は、理解度第3層に位置する『中国近代現代叢書目録』(1980)の記録から一步も抜け出してはいない。あるいは、第2層にまで退化していることになる。 □

表：「説部叢書」の変遷一覧(2014.10.24補訂)

1) 先元版 未組織 外国作品個々の翻訳 雑誌連載、あるいは単行本。普通名詞としての「説部叢書」

シリーズ名としての「説部叢書」

2) 元版1型(1903より) a 毛筆、b 活字併用、各一集十編

3) 元版2型(1905) 表紙の統一(タンポゴ文様 横組みの書名)、扉に元版1型bを併用するばあいもある

4) 改組(1908) 『商務印書館論集』222頁の推測にもどった

作品の差し替え 第一集第一編 『佳人奇遇』 『天際落花』(未見)

第一集第二編 『経国美談』 『劇場奇案』光緒三十四年六月(新出資料2013)

1908年改組と同時に第十集は第十編で完結、全一百編 箱売りは1908*18、1909、1911年に実行

注：付建舟が「十集系列」と称するのは、上の「3)元版2型」だ。「2)元版1型」については言及がない。

5) 初集100編(1913) 改称、表紙一新(リボン文様 紅色縦組みの書名)、編数は通し番号、全100編

6) 初集100編再版(1914.4) 金港堂との合弁解消を記念して

以後、2集(1915)、第3集(1916-24 ここから表紙は絵図)、第4集(1921-24)と続く

注：付建舟は、この初集本を「四集系列」と称する。初集作品の差し替えのみをいう。改名、移動には触れない。

【注】

13) 中村忠行「商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ」『野草』第27号1981.4.20

14) 神田一三名で発表。「商務印書館版「説部叢書」の成立」『清末小説』第25号2002.12.1。のち樽本『商務印書館論集』2006収録

15) 鄒瑞珩「“説部叢書”の胸懐」袁進主編『中国近代文学編年史：以文学広告为中心(1872-1914)』北京大学出版社2013.5

16) 祝均甫「説部叢書」卓如、魯湘元主編『二十世

紀中国文学編年(1900-1931)』石家荘・河北出版伝媒集団、河北教育出版社2013.4

17) 陳大康著『中国近代小説編年史』全6冊北京・人民文学出版社2014.1

18) 以前のもののほかに次の資料を追加する。闕文文『晚清報刊上の翻訳小説』(済南・齊魯書社2013.5.252、253頁)。『時報』光緒三十四(1908)年七月廿七日、八月十九日付けで商務印書館の広告あり。箱売りの宣伝だ。ただし、ふたつの広告に見える種類数と冊数は一致しない。理由は不明。

清末小説から

- 周 欣平 (清末時新小説集) 序 周欣平主編
『清末時新小説集』第1冊 上海世紀出版
股份有限公司、上海古籍出版社2011.1
- 陳 大康 論傅蘭雅之“求著時新小説” 『華
東師範大學學報』2013年第3期 2013.
5.15
(『中国近代小説編年史』) 導言：
過渡形態の近代小説 『中国近代小説
編年史』第1冊 北京・人民文学出版社
2014.1
- 内田慶市 イソップ東漸 中国語イソップ翻
訳史 『漢訳イソップ集』ユニウス
2014.2.28 文化交渉と言語接触研究・
資料叢刊3
- 王 宏志 “人的文学”之“哀弦篇”：論周作
人与《域外小説集》 『翻譯与近代中
国』上海・復旦大学出版社2014.6
- 范 軍 出版史研究的返璞帰真 關於胡国
祥著《近代伝教士出版研究》 『出版
史料』2014年第3輯(新総第51期)
2014.10
- 松村茂樹 長尾雨山と吳昌碩 『中国文化』第
72号 2014.6.28
長尾雨山が上海で参加した詩会につ
いて 『日本中国学会報』第66集 2014.
10.11
- 高 栄国 晚清民初時期托爾斯泰作品的訳介路
徑、原因及其誤読 『外国文学研究』
2013年第3期 2013.6.25
- 鄭文恵、顔健富主編 『革命・啓蒙・抒情
中国近現代文学与文化研究学思録』北
京・生活・読書・新知三聯書店2014.7
- 周新国等著 『太谷学派史稿』北京・社会科学
文献出版社2014.4 太谷学派研究叢書
淮揚文化研究文庫
- 孟昭毅等著 『中国東方文学翻譯史』上下卷
北京・崑崙出版社2014.4 東方文化集成
- 于 小植 『周作人文学翻譯研究』北京大学出
版社2014.4
- 李怡、羅維斯、李俊傑編 『民国文学討論集』
北京・中国社会科学出版社2014.4
- 石 曉岩 『重構与轉型 《小説月報》(1910-
1931) 翻譯文学研究』北京・社会科学
文献出版社2014.5
- 程 翔章 『晚清文学研究』世界圖書出版広東
有限公司2014.5
- 姚 一鳴 『中国旧書局』北京・金城出版社
2014.6
- 李 九華 『晚清報刊与小説伝播研究』北京・
中国社会科学出版社2014.7
- 張 沢賢 『中国現代文学翻譯版本聞見録続集
1901-1949』上海世紀出版股份公司遠東
出版社2014.7
- 中国モダニズム研究会 『中国現代文化14講
ドラゴン解剖学 登竜門の巻』関
西学院大学出版会2014.10.10
- 湯溢沢、廖広莉 『民国文学史研究(1912-
1949)』長春・吉林大学出版社2011.12
- 鄧 集田 『中国現代文学出版平台 晚清民
国時期文学出版情況統計与分析1902-
1949』上海文藝出版2012.3
- 孟 松 『清末偽訳小説研究』重慶・西南大
学碩士學位論文2013.4
- 郝 明工 『從經学啓蒙到文学啓蒙 現代文
学思潮的中国生成』北京・中国社会科学
出版社2013.11
- 蔡 俊 『中国近現代文学中的洋人形象』南
昌・江西人民出版社2013.12

昨年公開の『清末小説から』は15頁をご覧ください